空から来るもの

増田みず子

masuda mizuko

空から来るもの

増田みず子
masada mizuko

河出書房新社

増田みず子（ますだ　みずこ）
一九四八年、東京に生まれる。東京農工大学農学部卒業。一九七八年から一九八三年にかけ、「個室の鍵」「桜寮」「ふたつの春」「慰霊祭まで」「小さな娼婦」「内気な夜景」が芥川賞候補となる。一九八五年、「自由時間」で第七回野間文芸新人賞、一九八六年、「シングル・セル」で第一四回泉鏡花文学賞、一九九一年、「夢虫」で第四二回芸術選奨文部大臣新人賞受賞。

空から来るもの

一九九二年九月二一日　初版発行
一九九二年十二月四日　再版発行

著　者　増田みず子
装　幀　菊地信義
装　画　筆塚稔尚
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　三四〇四―一二〇一（営業）
　　三四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社

©1992　Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-309-00782-1

空から来るもの・目次

眠る街　5
夜景へ　49
硝子（ガラス）絵　91
隠れ家　133
えそらごと　179
あとがき　221
増田みず子著作目録一覧　222

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

空から来るもの

眠る街

今年の冬は、ここ数年で寒さが一番きつい。実際に気温も低いらしいけれど、暖冬が何年か続いたあとだから、よけいに体と神経にこたえたようだ。

美絵は暮れに風邪を引いて以来、なるべく外に出ないようにして暮らしていた。風邪ですっかり体調が狂って、ほんの少しでも体を冷やすと、熱やくしゃみが戻ってくる。風邪というよりも、冷気に対するアレルギーといった方がふさわしいような症状だった。

冷たい外気が大敵だと自分にいいきかせすぎたかもしれない。そのうち、窓をあけるのさえおそろしくなって、まるで、幽閉されているような気分になってきた。

日に当たらないせいもあるだろう。美絵は本物の病人と変わらない青白い顔になって、終日ベッドでうとうとして過ごした。起きていても横になっていても、めまいがする。風呂へもこわくて入れないから、体も垢じみてくる。

時々、思いだしたように窓から外の冬景色を眺めたが、ガラス一枚向こうの外が、ずいぶん遠

くに見えた。

夏から秋にかけての疲れが出たのだろう。疲れというよりも、むくいかもしれなかった。ゆっくり休めと、老いかけた体が警戒警報を発信している、と思うしかなかった。

その疲れの原因である周一が、日本からいなくなったら途端に、美絵の体のあちこちがぎしぎしと腐りかけた階段の踏み板のような悲鳴をあげ始めたのだった。もし周一がずっと日本にいて、今までのペースで美絵とつき合っていたとしたら、一体、どうなっていたことだろう。

周一がいなくなってしまったから、がっかりして気が抜けてしまったのだ、と思っていた方が無難だろうか。

現実に、周一がいないのだから、当面、美絵には、人に会う用事も外出の必要も、べつにない。ゆっくりと寝たきりの生活をしていたところで支障はないのだが、ただ、不安なのは、休めば休むほど、かえって衰弱していくような気のすることだった。

老醜、という言葉はまだ使いたくない年齢だが、鏡を見ると、どうしてもその言葉が浮かんでくる。確かにそんなような気配が、自分の顔にまとわりついて離れなくなった気がしてならない。

春になって周一が帰ってきたときに、そんなカサついた顔で迎えたくはない。少しは体操やマッサージもしなければ、しなびる一方になるか、本当の病人になってベッドから起きあがれなくなってしまう。そうした気持の焦りが、ないわけではないのだが、気持も体もいうことをきかなくなっている。何を思っても、思ったそばからすぐに忘れて、体ばかりがラクになりたがる。

夜も昼も変わらないような、浅く断続的な眠りが続く。いつでも意識はもうろうとしており、体はふらふらしていた。食べないのだから無理もなかった。食べると体の内側が汚れそうでいやなのである。

不思議なもので、空腹の度が過ぎて、もうろうとしてくると、頭の中も体の中も、透明な感じになって、ふわふわとどこまでも漂っていけそうな、軽々した気分に包まれる。そうしてたえず、睡魔にやわらかく抱きすくめられている。至福感のようなものもある。

麻薬というのはこんな気分ではなかろうか、と想像したくなるほどだった。もちろん、はっきり醒めている自分も一方にいて、どこまでだらしなく酔い続けていられるものか、意地悪い眼で観察しているのだけれども。

そうしてある日、冷静な観察者である方の美絵は、季節の移ろいを確認した上で、酔っ払いの方の美絵にドクターストップをかけたようだった。

その日の午後、美絵は突然ひどい空腹を感じた。おかゆを炊いてゆっくりと食べ、ビタミン剤を幾粒か、野菜ジュースで流しこんだ。

久しぶりに満腹すると、今まで体に張りついてとれなかった眠気が、嘘のように消えた。部屋の中の空気が埃っぽく感じられた。そこかしこにうっすらと埃が積もっていた。

室内は薄暗く、窓の外は和らいだ明るさに満ちていた。

美絵は、ようやく長い眠りから覚めたような気がして、パジャマを脱いだ。ひび割れたように

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

こまかいしわの走る、たるんだ皮膚も一緒に脱ぎ捨ててしまいたかったけれど、悲しいことに取りかえのきかないいっちょうらなのだった。

美絵は身じまいを整えてから、日溜まりになっているベランダの窓を、おそるおそるあけた。厚いセーターを通して、外気の冷たさがしみこんできた。外は見かけより気温が低く、風も強かった。

しかし、何日ぶりに吸う新鮮な空気だったろう。涙が出そうにおいしかった。背中に少し寒気が走った。冷気にむせて、たて続けにくしゃみをした。あわてて室内に戻り、窓をしめた。

鼻にティッシュを当てながら、美絵はねたましいような思いで、窓の下の通りを行く人々の軽やかな身のこなしを、じっと見つめた。

街を眺めていると、長く寒かった冬も、そろそろ底をつきかけているのがわかる。美絵のすぐ眼の前の窓ガラスの向こう側では、空気が光って、その光が飛びはねていた。あたたかそうだった。

思いきって、外へ出てみようか。そのへんを、ぐるっとひと回りしてくるだけ。とにかく、冬眠は、おしまい。

美絵は誘われるようにそう思い、少しだが気持を弾ませた。周一がアフリカかどこかから帰国する予定の日までに、あと十日しかなかった。

外に出る練習を始めるのに、早すぎることはないだろう。肌の張りと瑞々しさを取り戻すには、

少し遅すぎるかもしれないほどだ。

美絵は、顔を洗い、念入りにクリームをすりこんだ。髪をゆっくりとていねいにとかした。白く短い毛が、何本も目につく。抜きたいけれど、短かすぎ、多すぎて、どうにもならない。ここへ来て、また急に増えたようだった。白髪だけが、つやつやと太く光って、荒々しいほどまっすぐ天に向かって突き立っている。黒い毛の方は、色も光沢もあせ、こしをなくして、ブラッシングするたびに、うんざりするほど抜ける。

自分のいろんな持ちものが、古びて弱っていくのはしかたがない。それだけ長く生きて、使いこんできたのだから。手入れにも時間をかけ、修理もして、大事に使うしかないのだ。

美絵は、まだ三十九でしかなかったけれど、ひどく年をとり、修理もきかないほど弱ってしまっているような気分に襲われている。洗面所の薄暗い鏡に映った美絵は、老婆じみた表情をしていた。何だか、ちょっと見ない間に、顔の輪郭も眼つきも、研ぎ出されたようにとがってしまっている。

弾んだ気持はいっぺんに消え、ふっと、どこか遠くから冷やかな視線に見つめられている気がした。その幻の視線に射すくめられて、眼を閉じた。

身ぶるいしたくなるほど不快な感じが、体の中を走っていった。

なぜ今頃になって、そんなものを思いだしてしまうのだろう。

美絵は眼をあけて、醜く、とげとげしい自分と、しばらくの間、睨み合っていた。

美絵が本当に睨み返したかったのは、別のものだったのだけれど、現実にはこの世に存在しないものだったから。美絵の記憶の奥深くから、何の間違いでか、ぽろりとこぼれだしてきたものなのだ。

自分の影のようなもの、と思ってあきらめるしかないのだろうか。十五年も前に別れて、その後の消息も知らない、元の夫の眼を、美絵は鏡の背後の暗がりに見たような気がしたのだった。

記憶というのは、なぜこれほど丈夫で、腐りも風化もせずに、いつまでも用ありげな顔をして居残っているのだろう。

どうせなら、そんな古びて悪臭を放つような記憶でなしに、もっと新鮮で芳香のたつようなホカホカの記憶が出てくればいいのに。だが、美絵は周一の笑顔を思い浮かべようとする。なぜか周一の笑顔は、薄くぼやけて、はっきりとは思い出せなかった。

周一のことは思い出しすぎたから、記憶もすり減ってしまったのだろうか。それとも、つき合いの浅い周一の笑顔では、十五年も執念深くひそんでいた元の夫の冷え冷えした視線を、打ち消すほどの力を持たないのだろうか。

考えるまでもなかった。薄くぼやけた姿の周一は、くらべられるのが心外だというように、頼りなげに笑って見せ、背中を向けてしまう。美絵の記憶の中で、そんな元の夫は、つまらない男とつき合ってどうするつもりだ、と冷笑している。

美絵は、逃げるように洗面所を出た。明るい外にひかれて、またベランダの窓にはりついた。

やはり、出かけて気持をさっぱりさせてこよう。
もう一度、外の気温や風の強さを測るように、ガラス越しに眼をこらす。
コートをしっかり着ていけば大丈夫だろう。
どうせ私のは、半分以上が仮病なのだから。
ええ。どうせつまらないのは確かだけど、こんなつまらない女と結婚して、あなたはどうするつもりだったのかしら。でも、あなただってそんなに面白い男とはいえなかったわよ。
ムキになって、そう独りごとを呟いている。美絵の眼は、焦点をなくしていた。街の風景のずっと向こうの、見えないものが、ふいに透けて見えて来そうだった。

ずっと以前、短い期間だったけれど、結婚していたことがある。その頃のことを、美絵はふだん、めったに思いださない。思いだしたくないからだ。できればなかったことにしたいと思っている。
けれど、その三年間のことを、何も忘れていない。美絵の胸の奥深くにある暗い部分は、結婚生活がこしらえたといっていいものだ。苔むして澱んだ底なし沼のような、その影を、美絵は憎んでいる。
ふとした拍子に気力をなくし、電話の音や人の視線に怯え、自室にとじこもってしまう。頭の中はまっ白になって何も考えられず、飲食も受けつけなくなる。

今に始まったことでなく、時たまそんな症状が出る。うつ病の兆候があるのかと本気で心配した時期もあったが、医者に相談したことはない。

どういえばいいのか、初めてそうした状態に落ちこんだのは、結婚直後だったと思うけれど、ずっと、自分でこしらえた嘘の病気のような気がしてならなかった。確かめたことはない。いまさら、仮病かどうか確かめたってしようがないし、たとえ仮病と証明されたとしても、たぶんこれからも、サウナにでも入るように、その「仮病」に罹らないと、生きている気がしないのではないかとも思う。

最初は、夫から自分を守るために築いた、急場しのぎの仮病だったはずだ。夫は、仮病の激しさに圧倒されて、美絵に近づくことができなかった。若かった美絵は、その間、息をひそめるようにして、休んでいた。

傷をいやしていた、といったら、夫は大笑いするか、怒りだすに違いないだろうけれど。

あの仮病のおかげで、美絵は、結婚生活そのものを失うことになったが、そのかわりに、何度でも生き返るコツを、会得したような気もするのだ。

美絵が二十二のときに、大学卒業と同時に見合い結婚した男は、相原という名で、ちょうどひとまわり年上だった。

別れて思う相原への感想は、好みにいろいろと気むずかしいところはあるけれど、全体とすれば実にまともで立派な男だったと思う。実をいうと、見合いをした初対面のときから含めて、現

在に到るまで、美絵は相原を嫌ったことは一度もない。けれど一緒に暮らすことはできなかった。
相原が美絵を嫌ったからである。いや、嫌ったのではないのかもしれない。好きになるように懸命に努力していたのかもしれない。あるいは、自分の理想に美絵を近づけようと苦労していたのではないだろうか。そうして、一方では美絵に合わせて自分を変えようとさえしていたのではなかったろうか。
あの頃の相原は、美絵などには、動かしようもない、完成された大人に見えた。今の、四十になろうという美絵の感覚でいっても、相原は大人だったと思う。
相原にくらべれば、周一は見劣りがする。
美絵は、相原にふさわしい妻になる努力を早々に放棄して、見限られた。そう思っている。
「一緒に暮らせるかどうかは、お互いにどこまでがまんできるかということだと思うよ。一人じゃないんだから、がまんするのなんかはあたり前だけど、限度はあるからね」
新婚の頃の相原の口癖だった。それをいうとき、彼はにこやかに、おだやかに、噛んで含めるようにいって、じっと美絵の眼を見つめたものだった。愛情のこもった眼ざしであったのに、なぜか美絵はその眼がこわかった。そんなに思いをかけられては負担がすぎる、というこわさだったろうか。
美絵は、相原のしぐさや言葉や視線のひとつずつを、無造作に受け流すことができなかった。相原という大人の人格に慣れ、知識を得、理解し、一日も早く溶け合いたかったから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.